語彙構造と構文構造の対応

平　澤　洋　一

1.　用法差と意味領域

語彙の意味分析や体系化は昭和四十年代後半あたりから動詞語彙を中心に盛んになり，最近では語彙構造と構文構造との総合化をめざす論あり，語用論的分析や機能分析あるいは数理分析を加えた論あり，いろいろである。認知言語学の方法を導入した論考も急速に増えている。そして現在は，音韻論・形態論・構文論などといかにスムーズな相互関係をもつ語彙論・意味論を構築するかという段階にさしかかってきたように思われる。

ここでは「アセル・サメル」類の変化動詞を例に，語彙構造と構文構造の関係について考えてみたい。アセルには「焦る・急る」のアセルと「浅せる・褪せる」のアセルとがあり，＜海や川が浅くなる＞や＜人影が薄らぐ＞という意味特徴は今では失われてしまった。サメルには「褪める」「冷める」「覚・醒める」の意味があり，それぞれが別語か１語かという問題がある。現代語のアセル・サメル類については『ことばの意味Ｉ』でとりあげられたことがあり，

アセル＝もとの美しい色・つやが失われてみすぼらしい状態になる。

サメル＝付加色がとれて，生地の薄い色に近づく。

のような意味の記述をもって結論とされた。なるほどと思わされる面があるが，派生用法的な「酔いがサメル」「迷いがサメル」「迷いからサメル」「眠りからサメル」のような用法まで含めて扱うとなると，語彙論の意味記述と構文論上の構造記述とをどのようにマッチングさせるのだろうか，という疑問がわいてくる。

少し別の視点から考察を加える目的もあり，アセル／サメルのほかに，ウスクナル／ウスレル／ヒエル／ツメタクナル／カワルあたりまでを分析対象に加えてみる。

S1　カーテンの色がアセた。

　　カーテンの色がサメた。

　　カーテンの色がウスクナッた。

S2　印象がウスクナル。

印象がウスレル。

S3　記憶がウスレル。

S4　お茶がサメル。

S5　寒さで手足がヒエた。

寒さで手足がツメタクナッた。

S6　迷いがサメル。

迷いからサメル。

S7　風が西から南へカワル。

これらの表現形式の意味形成には，少なくとも＜変化前の状態から＞＜変化後の状態に＞＜主体が変化する＞という意味特徴が必要であり，最終的にはさらに細かな意味特徴の集合となる。アセル（褪）には＜色鮮やかさがなくなりみすぼらしくなる＞のような意味特徴が要るが，サメル（褪）やウスクナルでは問題になるのは薄くなることだけである。S2やS3のウスレルは，マイナス評価になることを必要条件としないから，アセル（褪）とは異なる。サメル（冷）・ヒエル・ツメタクナルでは，変化前の主体が高温であるとか常温であるとかは必須条件ではなく，変化前の状態より温度が低ければよい。帰着点を示す変化後の温度は，サメルでは＜温い＞，ヒエル・ツメタクナルでは＜低い＞が要求される。また，カワルは変化一般を表現することができるので，もっとも広い意味領域をカバーするような抽象度の高い意味特徴となる。主な意味領域の広狭[(1)]について対比的に示すと次のようになろう。

	［変化前］	［変化後］
	＜色つやがある＞	＜みすぼらしい＞
アセル（褪）	→	
ウスクナル	→	
ウスレル	→	
	＜色が濃い＞	＜色が薄い＞
サメル（褪）	→	
ウスクナル	→	
ウスレル	→	
	＜量が多い＞	＜量が少ない＞
ウスクナル	→	
	＜熱い＞	＜温い＞　＜冷たい＞
サメル（冷）	→	
ヒエル	→	
ツメタクナル	→	
	＜常態でない＞	＜常態である＞
サメル（冷）	→	
サメル（覚醒）	→	
	＜ある状態にある＞	＜別の状態にある＞
カワル	→	

プラス評価をともないやすい「迷いがサメル」「酔いがサメル」「薬を飲むと熱がサメル」「顔のほてりがサメル」などは＜常態でない＞→＜常態＞の変化，「眠りからサメル」「熱がサメル（興味がなくなる）」「興味がウスレル」などは評価の変化が必須ではない。ウスクナル・ウスレルは「色が濃い」主体に限定されないので「印象がウスクナル」「記憶がウスレル」のような表現が可能になるのであろう。また，「湯がサメル」「お茶がサメル」は，マイナス評価をともなうから＜熱い＞→＜温い＞という変化だけでなく，＜適温である→適温より低い＞をも含意している。また，「体がヒエル」は＜常温である＞→＜低い＞，「ビールがヒエル」は＜適温より高い＞→＜適温＞への変化であろうか。

2.　意味構造と構文構造

語彙のもつ意味の構造をできるだけ厳密に記述していくため，若干の用例の追加を行っておきたい（＊は非文を示す）。

S8　顔のほてりがサメル。＜常態でない＞→＜常態＞　※プラス評価。

＊顔のほてりからサメル。

S9　酔いがサメル。＜常態でない＞→＜常態＞　※プラス評価が一般的か。

酔いからサメル。

S10＊眠りがサメル。

眠りからサメル。＜ある状態＞→＜別の状態＞　※評価はふつう関与しない。

S11 ほとぼりがサメル。＜常態でない＞→＜常態＞　※プラス評価。

目がサメル（心の迷いがとける）。

S12 目がサメル（目が覚める）。＜ある状態＞→＜別の状態＞　※評価はふつう関与しない。

S8～S12は構文構造の面で重要な意味をもっている。つまり，同じ語形が意味構造レベルの［対象格］から表層の主語になる場合と，［起点格］から表層に出てくる場合とがあり，表層の構文構造に違いを生じさせている。S9はその典型である。S12の「目がサメル」は語義「眠りから覚める」においては＜ある状態＞→＜別の状態＞という変化，S11の「心の迷いがとけ本心に帰る」意では＜常態でない＞→＜常態＞の変化という意味特徴の差があり，前者は支配コードが日常コードで評価的意味が中立，後者では非日常コード・修辞コードが働いて評価的意味がプラス評価になる，といった差異がある。そして，文法論上の単位は単語であるが，S11は慣用表現であるから，全体で1語彙素として扱われることになる。

次に，アセル・サメル類に関与する「基底構造」（［　］で表示）と「意味特徴」（＜　＞で表示）とを以下に示す（ここに示すものは格モデルの一部）。

A＝［対象格］＜主体＞

B＝[起点格] ＜変化する前の状態から＞

B1＝＜変化前の主体は色つやが鮮やかで美しい＞

B2＝＜変化前の主体は色が濃い＞

B3＝＜変化前の主体は熱い＞

B4＝＜変化前の主体は適温である＞

B5＝＜変化前の主体は量が多い＞

B6＝＜変化前の主体は常態である＞

B7＝＜変化前の主体は常態でない＞

C＝［帰着点格］＜変化後の状態に＞

C1＝＜変化後の主体はみすぼらしい＞　※マイナス評価となる。

C2＝＜変化後の主体は色が薄い＞

C3＝＜変化後の主体は温い＞

C4＝＜変化後の主体は冷たい＞

C5＝＜変化後の主体は量が少ない＞

C6＝＜変化後の主体は常態である＞　※一般にプラス評価になる。

C7＝＜変化後の主体は常態でない＞　※一般にマイナス評価になる。

D＝［評価格］＜評価＞

D1＝＜プラス評価＞

D2＝＜マイナス評価＞

E＝［程度格］＜程度／焦点化＞

E1＝＜程度＞

E2＝＜焦点化＞

F＝［叙述］＜(主体が) 変化する＞

上記の基底構造は［A対象格］＋［B起点格］＋［C帰着点格］＋［D評価格］＋［E程度格］＋［F叙述］という要素連鎖であり，この構造からいくつかの表層構文構造が形成される。ここでの［対象格］は，［目的格］のような格ではない。［＋有生］の素性をもつ語句が［行為者格］ないしは［経験者格］から主語化されるのに対し，［－有生］のそれは，別の格である［対象格］から主語が形成される。

次に，構文構造と語彙基底構造との対応関係について。知的意味領域が選択された場合の語彙構造の基本は，［A対象格］＋［B起点格］＋［C帰着点格］＋［F叙述］となり，意味特徴は＜主体＞＜変化前の状態から＞＜変化後の状態に＞＜変化する＞という束になる。この構造には［D評価格］が存在しないから評価的意味が含意されることはない。表層の構文構造は次の頁(1)〜(5)の5種となり，アセル（褪）・サメル（褪）は［B起点格］＋［F叙述］あるいは［C帰着点格］

＋［F叙述］の構造をとることができない。

(1)　［A対象格］＋［B起点格］＋［C帰着点格］＋［F叙述］→AがBからCに変化する→風が西から南へカワル。

(2)　［A対象格］＋［B起点格］＋［F叙述］→AがBから変化する→始業時間が来週からカワル。

(3)　［A対象格］＋［F叙述］→Aが変化する→花の色がアセル，お茶がサメル，色がカワル。

(4)　［B起点格］＋［F叙述］→Bから変化する→眠りからサメル，迷いからサメル。

(5)　［C帰着点格］＋［F叙述］→Cに変化する→冷たくヒエル，紫色にカワル。

これに対し，評価・感情的意味領域が選択される場合には，［A対象格］＋［B起点格］＋［C帰着点格］＋［D評価格］＋［E程度格］＋［F叙述］という要素連鎖になる。構文構造は，基本的には(1)〜(5)に［D評価格］＋［E程度格］が添加されたものとなる。

このように，語彙が叙述部を担って構文上に現れる際には，語彙の基底構造と文法の構文構造との間に厳密な共起関係が働いており，ある構文の構造が［F叙述］に挿入される語彙項目の基底構造で説明のつく場合にかぎり，構文と述語の意味対応に矛盾がなくなって，文が生成される（対応しなければ非文となる）。この対応関係のモデル[(2)]を**図1**，**図2**に示す。

図1　知的意味の構文

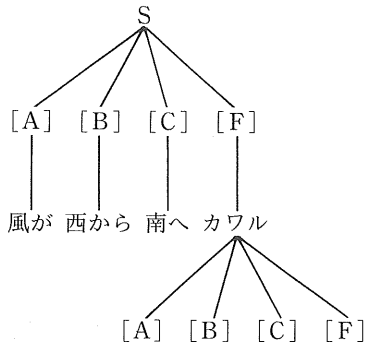
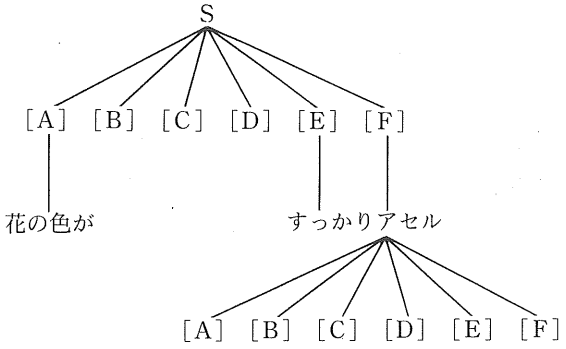


図2　評価・感情的意味の構文



3.　体系との整合性

サメル1（褪），サメル2（冷），サメル3（覚）を別語扱いにする場合の意味特徴の束は，これまでみてきた用例から帰納的にまとめるなら下記の記号列[(3)]になる。記号／は基底構造でどれか一つ以上が必ず選択されること，（　）は選択が任意であることを意味する。

アセル（褪）＝A＋B＋B1＋C＋C1＋D＋D2＋E＋E1＋E2＋F→花の色がアセル。

サメル1（褪）＝A＋B＋B2＋C＋C2＋(D＋D2)＋(E＋E1)＋F→布の色がサメル。

サメル2（冷）＝A＋B＋B3／B4／B7＋C＋C3／C6＋(D＋D1／D2)＋(E＋E1)＋F→お茶がサメル，熱がサメル，ほとぼりがサメル。

サメル３（覚）＝A＋B＋B7＋C＋C6＋（D＋D1／D2）＋（E＋E1）＋F→眠りからサメル，夢からサメル，迷いがサメル。

ウスクナル＝A＋B＋B1／B2／B5＋C＋C1／C2／C5＋（D＋D2）＋（E＋E1）＋F→色がウスクナル，髪がウスクナル，印象がウスクナル。

ウスレル＝ A＋B＋B1／B2＋C＋C1／C2＋（D＋D2）＋（E＋E1）＋F→記憶がウスレル。

ヒエル＝ A＋B＋B3／B4／B6＋C＋C4／C7＋（D＋D1／D2）＋（E＋E1＋E2）＋F→手足がヒエル，空気がヒエル，人間関係がヒエル，肝っ玉がヒエル。

ツメタクナル＝A＋B＋B3／B4／B6＋C＋C4／C7＋（D＋D1／D2）＋（E＋E1）＋F→お茶がツメタクナル，手足がツメタクナル，態度がツメタクナル。

カワル（変）＝A＋B＋B1／B2／B6＋C＋C1／C2／C7＋（D＋D1／D2）＋（E＋E1）＋F→色がカワル，態度がカワル，風がカワル，温度がカワル，来週からカワル。

ヒエルとツメタクナルの意味特徴の束はまったく同一なのではなく，ヒエルは［起点格］の＜熱い＞／＜適温である＞といった意味特徴より［帰着点格］に焦点がおかれて重視される用法が多いようである。このような働き方をする意味特徴を＜焦点化[(4)]＞と呼んでおく。この焦点化はアセルの［帰着点格］にも見られ，アセルには変化後の主体に＜みすぼらしい＞という意味特徴がついてまわるので，［帰着点格］への焦点化が行われ，［D評価格］D2＜マイナス評価＞が必須要素として機能すると考えることができる。そして，このようなアセル・ヒエルなどに比べると，カワルは「紫色にカワル」「信号が赤から青にカワル」のように［起点格］や［帰着点格］の状態に特別厳密な制限を受けない用法が多く，構文に現れ得る格選択の幅の広いのが特徴である。マイナス評価をともなう「お茶がサメル」は＜適温である＞→＜温い＞，プラス評価をともなう「薬で熱がサメル」や「顔のほてりがサメル」は＜常態でない＞→＜常態である＞への変化である。アセル・サメル類の表現形式と意味特徴との関係をまとめると**表１**のようになる（各語句に共通する意味特徴は表から省いて簡略化した）。

表１をもとに作成したデンドログラム１（図３）では，アセル（褪）が同じ漢字を当てるサメル１（褪）と同一の語群に存在し，サメル１も意味領域の近似するウスクナル・ウスレルと類似性の高い位置関係にある。一方，サメル２（冷）も同一漢字のヒエル・ツメタクナル（冷）と同じクラスターをなしている。つまり，色の変化が関与する「アセル（褪）・サメル１（褪）・ウスクナル・ウスレル」と温度変化にかかわりの深い「サメル２（冷）・ヒエル・ツメタクナル」が枝分かれをなし，同一漢字で意味領域の近似する類義語・類義語句が小語群をなしながら全体で一まとまりになって樹形図を形成しており，基底構造や構文構造との整合性もきわめて高いという結果になる。が，『広辞苑』や『岩波国語辞典』ではサメル１～３を１語として扱っており，この立場をとれば，サメル（褪・冷・覚）の意味特徴の連鎖はA＋B＋B2／B3／B4＋C＋C2／C3

表1　アセル・サメル類の意味特徴1

	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	D	D1	D2	E	E1	E2
アセル	＋	－	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	－	－	＋	－	＋	＋	＋	＋
サメル1	－	＋	－	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	－	±	－	±	±	±	－
サメル2	－	－	±	±	－	－	±	－	－	±	－	－	±	－	±	±	±	±	±	－
サメル3	－	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	－	＋	－	±	±	±	±	±	－
ウスクナル	±	±	－	－	±	－	－	±	±	－	－	±	－	－	±	－	±	±	±	－
ウスレル	±	±	－	－	－	－	－	±	±	－	－	－	－	－	±	－	±	±	±	－
ヒエル	－	－	±	±	－	±	－	－	－	－	±	－	－	±	±	±	±	±	±	±
ツメタクナル	－	－	±	±	－	±	－	－	－	－	±	－	－	±	±	±	±	±	±	－
カワル	±	±	－	－	－	±	－	±	±	－	－	－	－	±	±	±	±	±	±	－

図3　デンドログラム1

（群平均法）

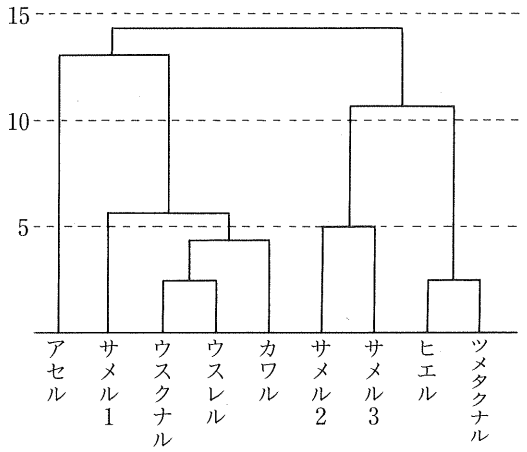
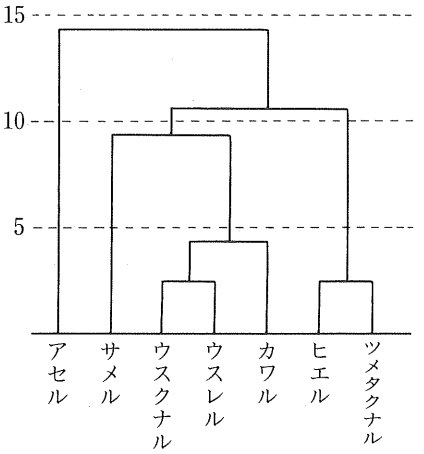


図4　デンドログラム2

（群平均法）



／C6＋（D＋D1／D2)＋(E＋E2)＋Fとなる。何か問題点がないだろうか。表1のサメル1～3をサメル1語に統合した**表2**をもとにデンドログラムを作成して検討してみる。デンドログラム2（**図4**）では，評価的意味のついて回るアセル（褪）とその他の語群とが枝分かれをし，サメル（褪・冷・覚）がウスクナル・ウスレルと意味的近似集団をなし，アセル（褪）はウスクナル・ウスレル（薄）との類似性が高いが，これは，サメルの中の「褪める」の用法が「冷める」「覚める」の用法に勢力を奪われ，それがクラスターの形成になったことを意味する。これでは

表 2　アセル・サメル類の意味特徴 2

	B1	B2	B3	B4	B5	B6	B7	C1	C2	C3	C4	C5	C6	C7	D	D1	D2	E	E2
アセル	＋	－	－	－	－	－	－	＋	－	－	－	－	－	－	＋	－	＋	＋	＋
サメル	－	±	±	±	－	－	±	－	±	±	－	－	±	－	±	±	±	±	±
ウスクナル	±	±	－	－	±	－	－	±	±	－	－	±	－	－	±	－	±	±	±
ウスレル	±	±	－	－	－	－	－	±	±	－	－	－	－	－	±	－	±	±	±
ヒエル	－	－	±	±	－	±	－	－	－	－	±	－	－	±	±	±	±	＋	＋
ツメタクナル	－	－	±	±	－	±	－	－	－	－	±	－	－	±	±	±	±	±	±
カワル	±	±	－	－	－	±	－	±	±	－	－	－	－	±	±	±	±	±	±

三つの意味領域をもつ多義語サメルの機能が語彙体系に十分に反映されないことになってしまう。以上のような理由から，サメルは見出し語を分けて扱うほうが問題点が少ないと思われる。

（注）

(1)　意味領域の一部は『ことばの意味１　辞書に書いてないこと』（平凡社）を参考にした。

(2)　あくまでモデルの仮定にすぎない。構文構造と語彙基底構造の結合の問題は，多くの語彙について実証的な研究を重ねて検討していかなければならない。

(3)　ここに示した記号列は，「アセル・サメル」類という極めて限られた語彙について限られた用例から帰納した意味特徴の束にすぎない。日本語の語彙全般が記述される段階では記号列そのものや選択制限などが修正される可能性がある。

(4)　焦点化は表現論レベルでの重要な表現技法の一つであるが，レトリックのように表現レベルでのみ機能させても説明のつくものではなさそうだ。暫定処置として焦点化は基底構造で規定されるべき要素であり，状態の＜程度＞（とてもゆっくり話す）・評価の＜程度＞（とてもすばらしい）などと同類の意味特徴とする。したがって，格は名詞格ではなく副詞格ということになる。焦点化については拙著『日本語語彙の研究』（武蔵野書院）の俳句意味論の章で詳述した。